



Title	生物主語から無生物主語へ : 日・仏対照研究
Author(s)	春木, 仁孝
Citation	言語文化研究. 2011, 37, p. 99-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

生物主語から無生物主語へ

一日・仏対照研究 一

春 木 仁 孝

Cet article, qui prolonge l'analyse de Haruki (2003), a pour but de mettre en lumière, d'un point de vue cognitif, certaines caractéristiques du français en le comparant avec le japonais aux particularités souvent opposées. Il sera question d'énoncés dans lesquels le verbe, normalement employé avec un sujet animé, ou même humain, est utilisé avec un sujet non animé. Il s'agit, par exemple, de verbes comme *parler, connaître, voir, aller, marcher*, etc. Les équivalents en japonais ne s'emploient pas avec un sujet non humain. En français, le sujet étant considéré comme une source d'énergie qui cause un changement d'état (ou de place), même un sujet non animé peut tenir ce rôle. C'est pourquoi de nombreux verbes à sujet animé peuvent être employés avec un sujet non animé. On peut même dire que le français est une vaste machine métaphorique.

キーワード：無生物主語、メタファー、日仏対照研究、

0. はじめに

筆者は春木（2003）において、認知言語学的な観点から因果連鎖とそれが言語化された実際の文の構造の対応について、日本語とフランス語の異同を検討した。また、主として移動を表わす表現についての日本語とフランス語の違いについても対照的な分析を行なった。その際、フランス語においては日本語に比べると移動や位置変化を引き起こす動詞の意味拡張が広く見られることや、状態変化を、移動を表わす動詞で表現することが多いことなどを見た。仮想移動表現に関しても、フランス語では日本語以上にその例が多いことなども見た。そして、それら一連の現象が密接に関連しており、フランス語では因果連鎖を、主として他動詞構文を用いることで事態が事態を引き起こす、すなわち〈（事態A）CAUSE（事態B）〉という形でエネルギーの伝播として表わそうとする傾向が強いということを指摘した。これは言い換えれば、他動詞構文の主語に来る要素を可能な限りエネルギーの出発点として捉えているということであり、そのようなプロトタイプから構文の意味拡張により、多くの事態を他動詞構文で表わそうという傾向が強いということである。

以上のことは、認知言語学以前からよく言われてきた、フランス語では日本語タイプの言語と比べると無生物や事態を主語とする文が多いということを、事態の認知の有り様という観点から説明したことになる。無生物や事態を名詞化して主語とするという現象は、フランス語だけでなく、英語その他の系統的に近いヨーロッパのいくつかの言語でも見られる現象である。ただ、英語に比較するとフランス語ではもう一つ注目すべき特徴がある。それは他動詞構文か自動詞構文かという違いに関係なく、無生物や事態を主語とする文が、本来的には生物を主語にすると考えられる動詞をとることがよくあるという点である。そのような現象を個別的に見た場合は擬人化という説明を与えることができるが、それがあある言語の中で方策として広く用いられている場合は、その言語の特徴としてその言語の有り様全体の中での意味を考える必要がある。

本稿では、フランス語に見られる本来は生物を主語とする動詞が無生物主語をとる文を対象に、日本語や英語の場合とも比較対照しつつ、その実際を観察して、フランス語全体の特徴の中でそれらの構文の存在が持つ意味、つまりはフランス語が認知的に見てどのような性格を持つ言語なのかを考えていきたい。

1. 発言を表わす動詞：parler, dire など

1. 1. 表現媒体を主語に取る場合

まずは本来は人間の発言を表わす動詞から見ていこう。

- (1) Ce film parle de la vie tumultueuse d'une femme.

「この映画はある女性の波瀾万丈の生涯を描いている」

- (2) Cette tapisserie raconte l'invasion des païens.

「このタピスリーには異教徒の侵略が描かれている」

- (3) De quoi ça parle le livre «Les enfants de la liberté» de Marc Levy?¹

「マルク・レヴィの『自由の子供達』という本には何が書かれているのですか」

- (4) un poème qui parle d'amour「愛について語る詩」

- (5) Je crois bien que la chanson parle d'une prostituée.

「私はこの歌は売春婦についての歌だと思う」

(1) (2) は春木 (2003) においても引用した例だが、「話す、語る」というのは言語を持つ人間の能力であり、その意味で典型的に人間を主語として取る動詞である。フランス語では、例にあるように film, livre, roman, poème, chanson など人間がそれを用いて語る媒体となるものを主語にした例が多い。その場合の意味拡張自体はメトニミーによるものと説明ができる。もち

1 これ以降、インターネットからの例も多いが、煩雑になるので出典となるサイトの URL を記すことはしない。またインターネットからの例は、そのような用法がどの程度一般的であるかどうかのネイティブのチェックを受けている。またフランス語としての適切さについてもチェックを受け、ネイティブのアドバイスにより、適宜、文に変更を加えており、作例に近いものもある。

ろん、日本語でも「この小説は～について語っている」や「この歌は～について歌っている」という言い方は可能ではあるが、やや翻訳調であることは否めない。日常的には、「この小説では困難な状況を乗り越えて夢を実現する少年のことが語られて／描かれている」とか、「この歌では春の美しい情景が歌われている」のように、受け身的な表現をとる方が自然であろう。いずれにしろ、「言う、話す」という動詞はフランス語の *parler* や *dire* のように、日常的に無生物主語を取ることはできない。

一方、類似の意味を持つ「語る、物語る、描く、伝える」といった動詞は、日本語でも比較的に無生物主語を取りやすい。特に「物語る」には例(6)に見られるように、人間が作ったものや人間の活動の痕跡が残る事物、あるいは地形や災害の痕跡、その他無生物主語を取っているように思われる用例が多く見られる。

(6) 今もキリシタン牢跡が残り、五島でのキリシタン弾圧の歴史を物語っている。
「物語る」も語源的には人が音声言語を用いて何かを語るという意味だと考えられるが、＜音声言語→文字言語→絵や図→事物＞というように、主語に来るものについての意味拡張が早くに起こったと思われる。ただフランス語の *raconter* がある事態がどのようなものであるか、あるいはあったかを具体的に描くという意味で用いられるのに対して²、日本語の(6)のような例で用いられる「物語る」は、(6)の例であれば五島でのキリシタン弾圧の歴史がどのようなものであったかを「推測させる、想像させる」、あるいはそのような歴史があったことを「伝える」という意味であり、フランス語の *raconter* や *décrire* のように具体的に説明するという意味ではない。むしろ見る者、聞く者が心の中でイメージを想起するような意味合いで使われており、一見すると似たような構文でありながらも日仏両言語の違いを浮かびあがらせている。その点をもう少し詳しく考えてみよう。

日本語の「物語る」は、「数字／タイトルが総てを物語っている」、「部屋の様子が彼の怠惰な生活を物語っている」のように「が」格の使用によって主語を特定できる場合もあるが、多くは例(6)や「生々しい地滑りのあとが残り、被害の大きさを物語っている」、あるいは「部屋にはカップ麺の容器が散らかっており、彼の怠惰な生活を物語っている」のような形を取っていることが多い。その場合、一応主語と考えられる事態が文の形を取っていることが多く、＜事態Aがあり、～を物語っている＞のように分析できる。この場合、「が」格の要素がないことの方が多い。もちろん、統語的には＜事態Aがあり、(それが)～を物語っている＞のように、「それが」のような主語要素が省略されていると分析することはできる。しかし、重要なのはこの形の文においては「物語っている」という動詞は、意味的には「想像(推測)させる→想像(推測)される」のように分析でき、自発的な性格を強く持っていると考えられることである。そのことが「が」格の省略を促進していると考えられる。このような分析が正しい

2 無生物主語を取る *raconter* の実例は非常に数が多いが、フランス人によっては(2)のような例では *décrire* 「記述する、描く」という動詞を用いる方が自然だという反応もある。しかし、いずれの動詞を用いてもある事態について具体的に説明するという意味は同じである。

とすると、*raconter*とその日本語訳と考えられる「物語る」であるが、無生物主語を取っている場合はその性格を大きく異にしていると言える。

話を元に戻すと、音声言語と密接な関係にある「言う、話す」は一時的な擬人化の場合を除けば、フランス語のような用例は日本語にはないと考えられる。翻ってフランス語では、既に中世の散文作品における場面転換を示す場合に以下のような表現が見られる。

- (7) En ceste partie *dit* li contes que li rois Artus sejorna a Kamaalot après la mort Gaheris jusqu'a l'assemblée ; (*La mort le Roi Artu*, p.81.)

「この部分において、物語は以下のことを語る。アーサー王はガエリの死の後、騎馬試合のときまでカマロットに留まった」

この例では、動詞 *dire* 「言う」が、*conte* 「物語」を主語に取っている。場面転換部分における上記のような動詞 *dire* の使用は、12世紀頃の散文作品では広く見られる。従って発言動詞が媒体である無生物を主語に取るという現象は、歴史的に見ても古いと言える。

以下は同じ媒体と言っても言語を用いない表現媒体を主語にした例であり、表現性の強い一時的で個人的色彩の強い比喩と考えられるが、このような比喩が成立すること自体が、ここで問題にしているフランス語の性格に基づいていると考えられる。

- (8) Lorsque la sculpture *bavarde*, je m'en détourne. Lorsque la musique *décrit*, je m'en détourne ... Je veux que chacun des arts *parle* le langage qui lui est propre, au lieu de *bégayer* dans une langue étrangère.

「彫刻が饒舌だと私はそっぽを向いてしまう。音楽が何か描写すると私はそっぽを向いてしまう。それぞれの芸術が、そぐわない言葉で下手におしゃべりする（どもる）のではなく、本来の言葉で語って欲しいと思う」

ここでは、*bavarder* 「おしゃべりをする、饒舌に語る」、*bégayer* 「どもる」という＜*parler*＋様態＞と分析できる動詞が用いられているが、引用半ばに基本となる *parler* が用いられていることで書き手の言わんとしていることが理解できる構造になっており、この例にみられる比喩の出発点に無生物主語を取る *parler* の用法があることが、明瞭に見て取れる³。

以上のように、発言を表わす動詞が無生物である表現媒体を主語にする用法は、日本語にはほとんど見られることはなく、フランス語の大きな特徴であると言える。

1. 2. 組織・グループを主語に取る場合

表現する媒体を主語に取る例について見たが、表現主体である人によって成立している組織やグループを主語に取る例も多い。

- (9) Oh! Toute la ville en parle. (‥) Tes après-midi ne sont plus un secret - Toute la ville le sait.

3 日本語でも「彫刻がおしゃべりをする」は、一時的で個人的な擬人化の比喩としてなら受容されるだろう。ただし、フランス語の引用例における意味とはかなりずれる。フランス語の例における意味は、おおよそ「饒舌すぎる彫刻、メッセージ性が強すぎる彫刻」という意味である。

「ああ、町中がそのことを噂している。君の午後はもはや秘密ではない。町中がそのことを知っている」

(10) Citrix *parle déjà de Cloud 2.0*

「シトリックスは早くもクラウド第2世代について話題にしている」

(11) On n'a pas encore fini de tout comprendre sur le Cloud première génération, et voilà que Citrix *annonce déjà la deuxième*.

「第1世代のクラウドについてもまだすっかり理解したというわけでもないのに、シトリックスは早くもクラウド第2世代を予告している」

(12) Microsoft *parle du nouveau Windows Live Messenger*

「マイクロソフトは新しいウインドズメッセンジャーについて話題にしている」

町や会社は人によって成立しているものである。これらの例も *parler*, *annoncer* がメトニミーによって無生物主語を取っていると考えられる。(9) については、日本語でも「町中がそのことを噂している／話題にしている」は容認されそうだが、「町中がそのことを話している」は自然とは言えない。つまり、「噂する」とか「話題にする」というように、「話す」行為の目的や様態を表わす動詞の場合は容認度は上がるが、「話す」というような具体的な人間の発言行為そのものを強くイメージさせる動詞の場合は、日本語ではグループ・組織についてもメトニミーによる拡張は難しいということである。

(11) の *annoncer* におおよそ対応する「発表する」は日本語でも会社や組織を主語に取ることができるが、やはり *parler* に対応する表現は無理である。フランス語では、＜会社名 + *parler de* + (新しい) 商品 (カテゴリー) 名＞という形式の文はよく使われている。もっとも、日本語でも会社名に「さん」をつけて、「…さんは～とおっしゃっておられるようですが」のような文は仕事上の会話という限定された場面などでは実際には用いられているようだが、やや特殊な文脈である上に、さらにこの場合の「…さんは」という表現は本当に主語なのかという問題もある。つまり、「…さんでは」「…さんの話では」などと同じような機能を持つ話題とも分析できるからである。

1. 3. それ以外の主語の場合

表現媒体や組織を主語に取る場合は、そのような用法を通常は用いない言語の話し手にとっても理解においては全く問題はないが、そのようなメトニミーによる拡張とは違ったタイプの例もフランス語には見られる。

(13) *Quand le silence nous parle*

「沈黙が私たちに（何かを）語りかけてくるとき」

(14) *À la fleur qui parle* 「話す花」（花屋の店名）

(15) *Dent qui pousse, dent qui parle*

「生えてくる歯、話す歯」(歯に関する本のタイトル)

(16) Corps parlant, corps parlé.

「語る身体、語られる身体」(身体についてのシンポジウムのタイトル)

(17) Le nouvel iPod shuffle vous parle.

「新しいiPodシャッフルは音声でお知らせします」

(18) Le Livre qui parle (=le livre audio)「オーディオブック」

(17)(18)の例は、録音された人間の声やときに合成音が実際に機器やCDその他のメディアから聞こえて来るわけだが、日本語ではやはり「音声でお知らせします」とか「声の出る本」のような表現になり、直接「話す」という動詞は使いにくい。人形などもともと人間あるいは動物を模したような物から声が出る場合は、「人形が話す、犬が話す」などと言ってもそれほど不自然ではないが、「最近では自動販売機がしゃべるのでうさーい」というような言い方は、素朴な反応の場合は別としてあまり自然ではない。

(13)や(15)(16)の例は、「沈黙そのものが何かを伝えている」「(歯の何らかの状態が)何かを知らせている」というような意味かと思われる。つまり、何かを意味する、何かの徴候になっているというような意味で用いられている。言い換えれば、対象となっている状況やものが持つ何らかのメッセージ性、つまり記号としての伝達機能をparlerという動詞で表わしているのである。

結局、意志のない事物が(記号として)発するメッセージを意志のある人間がメッセージを発する場合と同等に扱って同じ動詞を使っているということになる。フランス語で日常的に使われるvouloir direという表現もそのようなコンテキストで考えるとごく自然に理解できる。この表現は人間を主語に取れば「～と言いたい」となるが、単語や表現を主語にとれば「～ということの意味する」となり、まさに意志のない単語や表現が記号としてある意味を発しているという表わし方になっている。

(19) Qu'est-ce que vous voulez dire?「あなたは何を言いたいのですか」

(20) Ça veut dire quoi?「それはどういう意味ですか」

さらに単に情報を伝えるだけでなく、人に対して興味あるいは関心のある情報を伝える、つまり興味、関心、記憶を引き起こすという意味でも使われる。これは情報の伝達というものが基本的には受け手にとって意味のある情報の伝達であり、そのような情報は結果として受け手の側に何らかの反応を引き起こすというプロセスの結果の部分までが先取りされて語彙化されたことによる意味拡張と考えることができる。

(21) Ça te dit de sortir samedi soir?「土曜の夜、出かけるっていうのはどうだい」

(22) Ça me dit quelque chose.「それはなんか覚えがあるな」

さらに興味深いことには、parlerやdireに様態が付加されたchanter「歌う」という動詞にも、上のdireに似た「興味を引き起こす」という意味がある。これも歌が一般的に聞き手に心地良

い感覚を引き起こすというところから拡張された用法かもしれない⁴。

(23) Si ça te chante. 「それが君の気に入るならば」

これらの用法においても、やはり人間が話すことで何らかの情報を伝えたり、相手の反応を引き起こすという、人間を主語に取る場合の本来の意味が強く感じられる。

2. 発言を含む行為を表わす動詞

2.1. 情報伝達を表わす動詞

発言動詞ではないが、通常は人間を主語に取る動詞で言葉によって何らかの行為を行なう動詞があるが、やはりフランス語ではそのような動詞が無生物主語を取ることも多い。

(24) Ce livre nous apprend quelque secret du journalisme.

「この本はジャーナリズムの秘密を我々に教えてくれる」

(25) Ce livre nous apprend donc à tirer le maximum des occasions fortuites.

「この本は偶然の機会を最大限に利用するようにと我々に教えてくれている」

(26) Cet événement nous apprend beaucoup de choses sur la sexualité.

「この出来事は我々にセクシャリティーについて多くのことを教えてくれる」

apprendre は基本的には、人が人に外国語や何らかの知識・技術を教えたり、消息や情報を伝えるという意味で用いられる。しかし、フランス語ではやはり教えるための媒体を主語にしたり、あることを認識させるきっかけとなる事態を主語にすることも多い。例の訳ではすべて直訳調にしたが、無生物を主語とする「教える」の用例は、書き言葉の文体の日本語としてはおおむね容認可能であると思われる。3例の中では(24)の訳がやや不自然か、もしくは最も翻訳調に感じられるかと思われる⁵。その理由は、(25)(26)に比べて目的語がより具体的で個別的な点にあると思われる。日常的な日本語としては、「この本を読むとジャーナリズムの秘密を知ることができる」のような言い方のほうが自然である。他の例についても、「～を読むことで、～することが重要であることが分かる／～について多くのことを学ぶことができる／知ることができる」のように、人間を主体にした表現のほうがより日本語的な表現だろう。これは春木(2003)でも見た、フランス語では事態Aが事態Bを引き起こすというように事態を実際の因果連鎖に沿う形で言語化することが多いのに対して、日本語では事態Aを原因・理由として状況節の形で表わし、結果である事態Bを文の中核部分として表わすという、因果連鎖の言語化における両言語の相違とも対応している。

4 もっとも、chanter には話し言葉では「言う、話す」という意味もあるので、意味拡張の経過にはいくつかの可能性がある。

5 特に若い世代の人を初めとしてこの例に全く違和感を感じない日本人も多いと思われるが、この3例の中で多少とも違いを感じる人がいれば、それは例(24)に対してであるという意味である。

2. 2. 要求を表わす動詞

次に、必ずしも言語を用いて行なわれる訳ではないが、言語行為に準じるものとして要求を表わす *demander*, *exiger* 「要求する」という動詞についてもここで見ておく。

(27) *Les cheveux frisés et bouclés, ça demande beaucoup d'entretien.*

「カールした髪は手入れが大変だ」

(28) *Ça demande combien de temps pour avoir la carte du consulat ?*

「領事館のカードをもらうのにはどのぐらいの時間が必要ですか」

(29) *Ça demande du courage.* 「それをするには勇気が必要だ」

(30) *Ça exige que tu sois très professionnel, ça demande une grande concentration.*

「それをするにはプロでないとだめだし、かなりの集中力が必要だ」

(31) *L'amour exige un engagement total, jusqu'à la mort.*

「愛するということは、死ぬときまでその愛に身も心もそそがなければならない」

「要求する」という日本語は基本的には人を主語とする動詞である。メトニミーで組織やグループ、あるいは時代を主語にしている用例は日本語でも比較的が多い。しかし、以下の例からも分かるように、やや改まった文体という感じがつきまとう。

(32) 時代が数学を要求している（本のサブタイトル）

(33) 社会がどのような人材を要求しているのかを知ることが大切だ。

一般的には、上記のフランス語の例の訳で用いたような「必要だ／必要としている」、あるいは以下の例にも見られるように、「必要とされている／要求されている」というような受動表現の方が自然な日本語であり、人間を中心とする言い方のほうがより自然である点は *apprendre* の場合と同じである。

(34) 銀行から試算表の提出を要求された

(35) 学校で習う発音と要求されている発音のギャップについて

要求を表わす *réclamer*, *revendiquer* など同様に考えることができるだろう。

(36) *Cela réclame deux à trois jours de plus.* 「それにはさらに2, 3日余分に必要である」

(37) *Le coaching revendique une sagesse.* 「コーチをするには賢くなければならない」

いずれの動詞も *demander* などよりもより強い要求行為を表わす動詞であり、日本語的感覚からは無生物主語は取りにくいと考えたくなるが、フランス語の言語システムの中では、「人間の何かに対する強い要求」→「ある事態から発する別の事態の存在・生起に対する強い必要性」という平行性によって全く自然に受け入れられる用法である⁶。

2. 3. 遂行動詞の場合

発言によって何かをなすことになる遂行動詞の代表である *permettre* と *promettre* についても、

6 この場合もフォースダイナミクスの考え方を援用すれば、意味構造の平行性がさらに明瞭になるだろう。

フランス語では無生物主語を取ることが多い。

(38) L'hydroélectricité promet d'être durable. 「水力発電は持続性が約束されている」

(39) La sortie de la récession promet d'être lente.

「景気の落ち込みからの回復は時間がかかるのは確実だ」

(40) Les petits pots biologiques de légumes, ça promet !

「有機野菜の小瓶、これは絶対いいです」(幼児用の食品広告)

(41) Il tiendra une conférence de presse la semaine prochaine. Et Abidal promet aussi de lâcher ses «4 vérités». Ça promet !

「彼は来週に記者会見を行なう。そしてアビダルは色々と言いたいとも言わせてもらうと予告している。これは面白いことになる。」

約束をするためには意志が必要である。上記の無生物主語による文の意味は、現在の事態やある条件から出発して未来の事態を予測して、それが確実である、いい効果をもたらすという意味である。日本語ではやはり受動表現にしなければ不自然である。

(42) この新製品が利益をもたらすであろうことは約束されている(ようなものだ)

かっこに入れた「ようなものだ」がある方がより自然であると思われるが、これは推測や緩和の表現ではなく、直喩であることを表わしている⁷。つまり、受動表現にしても「約束する」は日本語では無生物主語を取りにくいということである。

permettre は事態を主語に取って、ある事態が別のある事態を引き起こすという因果関係を表わすために用いられることが多いのはよく知られている。これは最初にも述べた、事態と事態の間の因果関係をそのまま他動詞構文で言語化するという、フランス語の特徴をよく表わす構文でもある。日本語では、主語が人間か無生物かで「許可する」と「可能にする」という二つの表現になるが、フランス語では permettre 一語で両者の意味をカバーしていることになる。

(43) L'autopsie de Floribert Chebeya ne permet pas d'établir les causes exactes de sa mort.

「解剖によっても F.Ch. 氏の正確な死因を特定することはできない」(可能にする)

(44) Avoir des origines arabes permet d'accéder à des postes à responsabilités.

「アラブ系であることで責任ある地位に就くことができる」(可能にする)

(45) Je vous permets d'en penser ce qu'il vous plaira.

「それについてはあなたの好きなように考えてかまいません」(許可する)

permettre のこのような意味拡張は、単なる主語の擬人化という説明の枠内には収まらない。何故ならば、permettre の主語は多くの場合、例(44)のように不定詞であったりあるいは抽象名詞であったりと形は様々だがそのまま事態を表わしている名詞相当句、もしくはメトニミ的に事態を表わす名詞(例：雨＝降雨)であるのが一般的であり、人間と事態が対応している。つまり、単に主語部分の見立ての問題ではなく、事態全体をエネルギーの伝達の出发点という

7 推測や口調緩和でないことは、「～は確実だ」と言い換えることができることから分かる。

形で捉えようとするフランス語の本質の現われとして考えなければならない。その点からも、Talmyのフォースダイナミックスを援用することができる。人間が主語の場合は、人間の意志が許可を出すことである人があることを行なうことが可能になる。事態が主語の場合は、ある事態の存在あるいは生起がもう一つの事態が起こることを可能にする。いずれの場合も、(結果として示される)ある事態の生起に対してデフォルトで想定されている障害が、人間の意志または状況(=事態)によって取り除かれることで、その事態が生起へと向かうことになる。人間の意志と状況という異なる領域ではあるが、抽象的なレベルでは全く同じ意味構造を持っていることが、フォースダイナミックスの考え方を援用することで明瞭になる。

permettreと似た操作を行なっている動詞にinviterやpousserがある。inviterは、ある事態が人に対して一定の行動をするように促すという意味であり、pousserはある行動をするようにと圧力をかけると意味でありinviterよりも行為の実現性が高いと言える。

(46) L'ombre tiède du parc invitait à la flânerie. (Martin du G.)

「公園の暖かい日陰が散歩心を誘っていた」

(47) un petit film qui vous invite à penser「色々考えさせるちょっとした映画」

(48) Le rapport invite à agir maintenant.

「報告書を読むとすぐに行動しなければならない状況だ」

(49) Qu'est-ce qui vous a poussé à faire une tentative de suicide ?

「どうして自殺しようという気になったのですか」

(50) Les soldes, un prétexte de plus pour pousser à la consommation ?

「バーゲンというのはお金を使うためのさらなる口実ではないだろうか」

(46)の例はやや文学的で、日本語訳でも「誘う」を使う事が出来る⁸。それ以外の例はごく日常的な用例である。日本語では「促す」「あおる」などが比較的これらの動詞に似ていて無生物を主語に取ることができるが、人間を主語に取る場合に比べると無生物主語を取る文はやはりやや書き言葉的な感じが否めない。

(51) 国連の報告書は環境問題に対して早急な行動を(取ることを)促している

(52) きらびやかなショーウィンドウがさらなる消費／購買意欲をあおっている

3. 認識を表わす動詞

フランス語では人間の認識を表わす動詞が無生物主語を取る例がある。認識を表わす代表的な動詞としてはconnaîtreが挙げられる。この動詞は人間が何かを知識として知る、知っている、あるいはある事態、状態を経験するという意味を表わすが、無生物主語を取る用例は非常に多い。

8 「散歩心を誘う」は個人的には抵抗があり、「散歩心をそそる」のほうがいいと思われるが、一般に「遊び心を誘う」のように「～心を誘う」というのは慣用パターンとして定着しているが、「*行動を誘う」とか「*消費を誘う」というような使い方はやはり不自然である。

- (53) La France a connu son deuxième automne le plus chaud depuis 1900.

「(2009年) フランスは1900年以降2番目に暑い秋だった」

- (54) L'art a connu une révolution entre le 19^{ème} siècle et le 20^{ème} siècle, (…). .

「芸術は19世紀と20世紀の間に大きな変革を被った」

- (55) Le XX^e siècle a connu de grands progrès scientifiques.

「20世紀には科学は大きく進歩した」

- (56) Son film a connu un grand succès. 「彼の映画は大当たりをとった」

- (57) La production cinématographique marocaine a connu un «grand tournant» ces dernières années.

「モロッコの映画制作はここ数年、大きな転換点を迎えている」

- (58) La version première de ce produit a connu plusieurs mutations (de durée, de garantie) pour l'adapter au mieux à la population cible.

「この製品の第1世代はターゲット層により一層受け入れてもらうために、(持続時間、保証期間など) いくつかの変更を施された」

どのようなものが主語として現われる頻度が高いかを調べて見ると、町や国などの場所を表わす名詞、特定の時代などの時間を表わす名詞、組織を表わす名詞、芸術や科学など分野・領域を表わす名詞、特定の作品を表わす名詞などが挙げられる。中でも町や国、あるいは時代などを主語に取る場合は、一応メトニミーによる意味拡張と説明することができる。しかし (57) (58) などの例もあり、単なるメトニミーによる拡張というよりも、全体的には、後で見るようなフランス語の基本的な性格との関連で考えるべきである。

いずれにしろ、日本語の場合は「知る、知っている」という動詞をこのような意味で用いることは基本的にはできないか、かりに用いることができたとしても非常に翻訳調の文になってしまうだろう。

- (59) ?? 日本はこの年、開国という大きな変化を知ることになった

- (60) *会社はこの年大きな節目／転換点を知った

connaître 以外に無生物を主語にとることができる認識に関する動詞としては、voir を挙げることができる。

- (61) Cette ville a vu un grand changement.

「この町は大きな変化を被った」

- (62) La saison 2008-2009 a vu un grand changement dans le monde du poker.

「2008-2009年のシーズンにはポーカーの世界では大きな変化があった」

- (63) Le pays a vu pire, nous devons rester calmes.

「この国はもっとひどいことも経験した。我々は冷静でいなければならない」

以上の例ではいずれも voir を connaître で置き換えることができるので、これらの用例における二つの動詞の機能はほぼ同じものだと考えられる。voir も主語に時代や町、地域などを取るこ

とができる。ただ、目的語となる名詞には微妙な相違が感じられる。例えば、voirはconnaîtreの目的語としてはよく見られるsuccèsを目的語に取りにくいようだが、changementはvoirの目的語としても頻度は高い。これは、人間を主語とする通常の用法においても、voirの場合は主語と目的語との間に単にメンタルコンタクトあるだけだが、connaîtreの場合は主語は経験者としてより大きな影響を受けるという点と関係があると考えられる。つまりchangementは多くの場合、表面的なものだが、succèsは主語の精神や社会的立場などにより大きな影響を与える出来事である。

voirにはまた、英語における間接目的語を主語にした受動態に対応すると分析される、<se voir + 不定詞>という構文があり、この構文には無生物を主語に取るものが多いが、これはかなり文法化が進んだ表現と考えることができる。

- (64) DCNS s'est vu attribuer les contrats d'entretien des sous-marins de la Marine nationale pour un milliard d'euros.

「DCNSは10億ユーロで海軍の潜水艦整備の契約を獲得した」

- (65) La banque portugaise BPP s'est vu retirer sa licence d'exploitation.

「ポルトガルのBPP銀行は開発許可を剥奪された」

視覚を表わすvoirによる場合に対して、聴覚を表わす動詞entendreが無生物主語を取っている例も、数は少ないものの以下のように存在する。ただし、「すべての町＝町中の人」「町＝行政機関としての町」のようにメトニミーとして理解しやすい例が多く、(68)のような時間表現を主語とするような例はvoirの場合とは違い珍しい。それはどのような事態も「見る」ことはできるが、「噂」や「意見」は別として、ことさらに音として事態を捉えるという場合はあまり考えられないからであろう。

- (66) Toute la ville a entendu parler d'elle. 「町中の人々が彼女のことを聞いた」

- (67) La ville a entendu les remarques des habitants et maintient donc le projet initial.

「町は住人の意見を聞き、その結果最初の計画を維持している。」

- (68) Il est vrai que je surveille mes quelques lis de près, et cette année a entendu moins d'une dizaine de craquements de bestioles sous mes doigts.

「確かに私は自分の百合を近くから見守っているが、今年は私の指が虫を殺す音は10回もなかった」

以上のようにフランス語では「知る、見える、聞こえる」という、人間の認識能力を表わす動詞までもが無生物を主語にした文を作ることができる。この場合は「事態の認識→事態の直接的経験→事態の見聞→事態の生起」のように、認識主体と事態との関わりが薄れていくことで無生物主語を取る用法へと拡張されたのである。

4. 移動を表わす動詞

4. 1. 有生物の移動を表わす動詞

春木（2003）においてはフランス語における移動表現の広がりについてみた。そこでは、仮想移動や状態変化を位置変化として捉えるフランス語の特色について見た。ここでは、それらの現象を生物主語と無生物主語の対立という観点から見直してみる。なぜなら、状態変化を移動動詞で表すことが多いという現象は、結局、有生物主語の位置に無生物主語を用いることが多いという観点から捉えなおすことが出来るからである。

先ず *Ça va ?* という挨拶言葉でよく知られている *aller* 「行く」について見てみよう。人や生物が遅滞なく前に進んでいくイメージから、体調や物事の進行具合が順調であることを表わすように意味拡張が起こったことは容易に理解できる。その際に、フランス語独特の状況全体を指示する代名詞 *ça* の存在が拡張を容易にしたと思われる。さらに随伴のイメージから随伴をプラスに評価・解釈することで、食べ物や服装、色などの取り合わせの良さへと意味が拡張される。

(69) *Cette couleur te va très bien.* 「この色、君にとってもあってるよ」

(70) *Ce vin va tres bien avec des grillades.* 「このワインは焼き物料理によくあう」

これらの意味拡張の基盤には人間が障害物にあうこと無く順調に前に進むという身体性が関わっているので、「行く」に類する動詞で健康状態その他の状態の善し悪しを尋ねる言語はフランス語以外にも存在することは当然予想される⁹。

もちろん、仮想移動表現として *aller* が経路を主語に取る例、および経路を時間に写像した例も無生物主語を取る用法として存在している。経路を主語にしている場合は日本語では普通、「続く」が使われ、「行く」は不自然である。また時間表現の場合は日本語では「～にわたる」や「～から～にかけての」などの表現が使われ、「行く」を使うことはできない。

(71) *Ce chemin va du port vers le nord de la ville.*

「この道は港から町の北部へと続いている」

(72) *Il étudie une époque qui va environ du milieu du XI^e siècle au milieu du XII^e siècle.*

「彼は11世紀半ばから12世紀半ばにわたる時代を研究している」

さらに経路を何らかのスケールを持つ領域に写像した *aller de ~ à ~* という形式の例もよく用いられる。

(73) *des amendes allant de 150 euros à 15 000 euros*¹⁰

「150ユーロ以上15000ユーロ以下の罰金」

この *aller* に様態が加わった *marcher* 「歩く」、*courir* 「走る」にも無生物主語を取る表現が多くある。

9 実際、ドイツ語でも健康状態を尋ねるのに *gehen* 「行く」が用いられるし、中国でも「行」は「好」と同じような意味で用いられる。日本語でも、「これはいける／いけている」というように「行く」の拡張が見られる。

10 この例に見られるようにこの *aller de ~ à ~* という表現は *aller* が現在分詞の形で用いられることが多く、一種の前置詞句のようになってやや文法化しているとも言える。

- (74) (試験などのあとで) Ça a marché? 「うまくいったかい？」
 (75) Ça marche! 「うまくいった、オッケーだ、分かりました¹¹」
 (76) Cet ordinateur marche bien. 「このコンピュータは調子がいい」
 (77) Ce mot de passe ne marche pas. 「このパスワードは間違っている」
 (78) Un bruit court sur votre compte. 「あなたについての噂が広まっていますよ」
 (79) Un ruisseau court à travers du village. 「村を横切って小川が走っている」
 (80) Un fil électrique court le long de la porte jusqu'à une prise près de là.

「電気の線が扉に沿って近くのコンセントまで通っている」

- (81) Le temps court vite. 「時間が速く過ぎていく」

marcherはallerの場合と同様に前に進むという身体性から物事の進行、さらには機器の順調な働きへと拡張したものであろうが、その際には人間が歩いて進むという様態の部分は結果的に捨象されてしまっていると考えられる。日本語の「歩く」や英語のwalkにはフランス語のmarcherに対応する用法はほぼ皆無といってよい。

一方、「走る」に関しては日本語においても、「悪事千里を走る」、「驚きが走る」、「稲妻が走る」のように移動の「速さ」をプロファイルする拡張が存在している。速さとは関係のない、連続性に注目した、そして視線の移動とも関連した仮想移動表現として「小川が走る」、「山並み／山脈が走る」「断層／鉱脈／水脈／亀裂が走っている¹²」のような表現も可能であるが、仮想移動に関しては英語やフランス語に比べると日本語の許容範囲はやや狭いようである。「谷にそって街道／道が南北に走っている」は容認度が高いと思われるが、「市内を国道171号線が走っている」「河に沿ってJRの線路が走っている」などの表現は、実際には頻繁に使われているようだが、にもかかわらず人によっては違和感を感じるという反応もあるようである。その人達にとっては、「走る」ではなく「通る」を用いるのが自然である¹³。運河や電線、電話線のようなものに関しても、日本語では「走る」が使えるかどうかは個人によってかなり揺れがあると思われる。

仮想移動以外に関しては、「時間／時が走る」は日本語では不自然である。少なくとも、目に見えないものの進行には日本語では「走る」は使えないと言える。

「進む」にやや特殊な様態が加わった動詞にgrimper「よじ登る、這い上がる」がある。

- (82) Le chemin grimpeait parmi les hêtres. 「道はブナの間急な坂道になっていた」
 (83) La température va grimper. 「気温はぐんぐん上がるでしょう」
 (84) Qu'est-ce qui fait grimper la tension artérielle? 「何が血圧を高くするのか」

11 カフェやレストランで客の注文に対してウエイターがÇa marche! 「分かりました」と答えることがあるが、これもフォースダイナミックス的には、なんの障害もなく事態（この場合は注文）が実現に向けて進むことを表わしていると解釈できる。

12 フランス語でもle gisement court「鉱脈が走る」、cette fissure court tout le long du plafond「この亀裂は天井に沿って走っている」などは可能である。courirが用いられている他の用例としてle lierre court sur les maisons「家々にツタがはっている」などもある。

13 個人的には筆者も道や線路に「走る」を使うのは、例によっては違和感を覚える。

(85) *La fumée grimpe le long des parois.* 「(火山の) 内壁にそって煙が這い上がってくる」

(82) の例は春木 (2003) でも仮想移動の例として取り上げた。(83) は、急な坂道のイメージスキーマと気温上昇のグラフのイメージが結びついて可能になった拡張である。日本語ならば、「ぐんぐんあがる」とか「気温はうなぎ登りにあがるでしょう」とも言うところである。この場合、日本語は「鰻が急流をのぼるようにあがる」という直喩であるのに対して、フランス語の *grimper* の用法は隠喩的であると言える¹⁴。(84) も (83) と同様に理解できる。(85) の場合は日本語でも「這い上がる」とフランス語に近い表現が可能であるが、これは煙が動くことにより擬人化が容易であるからであろう。

春木 (2003) でも見た *arriver* もフランス語では無生物主語を取る表現が多い。生物主語を取った場合が「到着する」、無生物主語を取った場合が「起こる」に対応する。

(86) *Il est arrivé que l'on retrouve des chiens plus de 10 ans après leur départ !*

「犬がいなくなって10年以上もたってからその犬が見つかることがある」

(87) *Ça ne m'arrivera jamais.* 「私がそんなふうになる／することは絶対ありません」

arriver の反対語 *partir* に関しても春木 (2003) で見た例を挙げる。

(88) *Deux routes partent de la mairie.* 「2本の道が市役所のところから出ている」

(89) *Ses mots partent du cœur.* 「彼(女)の言葉は心から出たものだ」

(90) *Mon contrat part de mars.* 「私の契約は3月に始まる」

(88) は仮想移動の例であり、(90) は時間への写像例、(89) は導管メタファー等による拡張例である。(88) (89) の訳で用いられている「出る」は生物・無生物に限らずあるところを起点にして外に現われるという意味であって起点や出現がプロフィールされているが、フランス語の *partir* はあくまでも経路も含意していて、日本語よりは移動のニュアンスが強い。

aller 「行く」に対応する *venir* 「来る」、および接頭辞のついた *revenir* 「戻って来る」も無生物主語を取ることが多い。これらの動詞に関しては仮想移動よりも、*arriver* の場合にも見られた、事態の生起を移動表現で表わすというフランス語の特徴に対応している。

(91) *Il m'est venu / passé (à l'esprit) une bonne idée.* 「いい考えが浮かんだ」

(92) *Il revient aux États d'origine de prendre leurs responsabilités à l'égard de leurs citoyens.*

「自国の国民に対して責任を持つのは出身国の責任になる」

(93) *Ça revient au même.* 「結局同じことになる」

(94) *Le mot ne vient pas.* 「言葉が出てこない」

(92) の例に関しては日本語でも「～の責任に帰す」という表現があるが、これはかなり文語的な表現である。(93) では日本語は「結局同じことになる」というように、(92) の訳「～の責任になる」と同様に現象的に捉えているのに対して、フランス語では (92) は同じところに帰着するという円環的な動き、あるいは (92) (93) とともにスキヤニング操作の結果として捉

14 「うなぎ登りに」の語源には複数の説があるが、いずれにしても直喩であることには変わりはない。

えていることになる。revenirの接頭辞re-は、もとの場所への帰着を表わすのではなく、「あるべきところへの帰属」を表わすスキニング操作の痕跡であり、日本語の「当然、やはり、結局」などの言葉の働きに対応している。

事態の生起を表わすarriverの場合や無生物主語を取るvenirの場合に対しては、日本語では「起こる、浮かぶ、出てくる」というように、いずれも自然発生的なとらえ方をしている。フランス語では、見えない遠い場所からその場に移動してくるというように事態の生起を捉えるが、日本語では見えてなかったものが、まるで水の中から浮かび上がってきたり、地面から立ち上がってくるように事態の生起を捉えるのである¹⁵。「出てくる」というのも、フランス語のarriverやvenirのように遠くからの移動を表わすのではなく、あくまでもその場で何かの後ろや陰から出てくるように事態が起こると捉えているのである。

人の移動を表わす表現を取り上げた本節の最後に、関連する現象として移動の結果を表わすs'installerについて見ておこう。この再帰構文を取る動詞は「身を落ち着ける、住む（住み始める）、座る」など、人が長期的あるいは短期的にある場所に身を置くことを意味する。しかし、この動詞も以下の例のように気候、病気、雰囲気、状況など無生物を主語にとる場合がある。

(95) Si l'anticyclone s'installe sur le nord ou l'est de l'Europe, le temps est plutôt chaud sur notre pays.

「高気圧がヨーロッパの北部または東部にあると、我が国の天気はどちらかというと暑くなる」

(96) La dépression s'installe progressivement et il est possible de repérer ses premiers symptômes.

「鬱の状態というのは少しずつ進行していくものであり、初期の兆候に気づくことは可能である」

上記のいずれの例においても日本語では、「腰を落ち着ける」などの表現を使うことはできない。「高気圧」に関連して言うならば、「台風」については「台風18号は今は四国沖あたりにいるらしい」のような擬人的な表現を使うことが出来る場合があるが、それは台風が動きが速かったり、被害をもたらすなど擬人化しやすい条件があるからである。一方、高気圧に関しても、たとえば「今年は太平洋高気圧がいつまでも居座っているので9月になっても暑い」のような表現を使うことができる。しかし、s'installerに似ているものの、「居座る」という動詞は被害を含意しており、そのような場合にのみ使える表現である。つまり、このような場合の無生物主語をとった「居座る」はあくまでも状況に依存する比喩表現であり、もたらされる利害との関係で擬人化が行なわれているのであり、フランス語のように言語の一般的な方策としての用法ではないのである。

15 フランス語でも、Le vent se lève.「風が立つ＝起こる」という表現は日本語に近い発想である。

4. 2. 人が有生物を移動させる表現

フランス語では、人及び有生物を主語にして目的語にやはり人または有生物を取る使役移動動詞も、無生物主語を取って用いられることが多い。春木（2003）の例を再掲するとともに、新たな例も付け加えて示す。

(97) Tous les chemins mènent à Rome. 「総ての道はローマに通じる」

(98) Il mène une vie solitaire. 「彼は孤独な生活を送っている」

(99) Cette route vous conduit à la ville. 「この道を行くと町へ出ますよ」

(100) Cet échec l'a conduit à la retraite. 「この失敗のせいで彼は引退を余儀なくされた」

(101) Cela nous amène à nous poser des questions sur ses réelles motivations.

「それを見ると／考えると彼（女）の本当の動機について考えざるを得なくなる」

(102) Ses échecs l'ont porté à redoubler ses efforts.

「失敗は彼の努力をいっそうかき立てた」(ロワイヤル仏和中辞典)

(97) (99) は仮想移動表現であり、(98) は (仮想) 移動表現の線のイメージが時間領域に写像されたものである。一方、(100) (101) (102) の例は事態Aが事態Bを引き起こすというフランス語の好む他動詞構文であり、改めて説明する必要もないであろう。

5. その他の表現

フランス語に関して、本来は人間を主語に取る動詞が無生物主語を取る場合をいろいろと見てきたが、以上の分類では扱えなかった動詞を気付いた範囲で少し補足しておこう。まずは travailler 「働く」という動詞の例を少し挙げる。

(103) Cette machine travaille sans problèmes. 「この機械は問題無く動いている」

(104) Cette usine travaille jour et nuit. 「この工場は昼夜を分かたず操業している」

(105) Le temps travaille pour lui. 「時は彼に味方している」(ロワイヤル仏和中辞典)

(106) Mon imagination ne travaille pas. 「想像力が働かない」

(107) Le vin travaille. 「ワインが発酵している」

(108) Les couleurs travaillent. 「色があせてきている」

(109) L'estomac me travaille. 「胃がしんどい」

日本語では働くのは人間であり、機械は動くのである。もちろん、「この機械はよく働いてくれるわ」のような比喩表現は可能であるが、これまでも見てきたように利害や評価が関係する文脈での擬人化であって、本来の用法ではない。それに対してフランス語の (103) や (104) の例は、メトニミーによる拡張が起こったものである。(105) と (106) は (103) の機械や機器など具体的なものを主語にした場合を抽象的な領域に写像したもので、一定の効果・結果を生み出す目に見えない作用や機能を表わしている。日本語でも (106) の訳はよく使われる。さらには機能・作用する→効果・結果を生みだす→変化するという拡張から、(107) や (108)

のような用法もある。一方、(109)の用法は、travaillerの「苦役を課される、苦しい目にあう」というような語源的な意味と関連しているのかもしれないが、共時的には胃が作用して結果的に苦しく感じるというように、やはり一種の拡張としてtravaillerという語の意味のネットワーク上に位置していると考えerべきであろう¹⁶。

最後に使役的な目的語に人の代わりに無生物を取る例を少し見ておく。というのも、それらの構文においても、目的語はいわば自動詞の主語であるからである。

(110) Tu veux fatiguer la salade ? 「サラダを混ぜてくれるかい」

この表現は方言的なものである可能性があるが、fatiguerは人であれ仕事であれ、何かが人を疲れさせるという意味である。結果的に人が疲れるのであるから、人の代わりにサラダ菜が「疲れる」と考えれば、やはり人の代わりに無生物主語を用いているのと同じである。フランス語にはmoteur fatigué「疲弊したエンジン」という表現もあるが、これに対しては「このエンジン、かなりくたびれている¹⁷」と日本語でも同じように言えなくはないが、サラダ菜には無理である。fatiguer la saladeはシコレ（キクザシヤ）のようにシャキツとしたサラダ菜を酢を使用したドレッシングで混ぜて食べやすくする場合に使われるので、日本語的に言えばサラダ菜を「(多少)クタツとさせる」にあたる。

料理に関した表現を見たついでに以下の表現も見よう。

(111) Elle a fait sauter un poulet. 「彼女は鶏をソテーにした」

sauterは本来的には人間や動物が跳ぶことである。そこから「考え／話しが飛ぶ」「爆発する」(faire sauter le pont「橋を爆破する」)などと意味が拡張されていく。faire sauter「ソテーにする」というのも、炒めるときに音を立てることと「爆破、爆発」のイメージとの関連や、野菜やジャガイモなどをソテーにする場合は多少は跳ねるであろうところから出てきた表現かと思われる¹⁸。

これ以外にも、本来は人を主語に取る動詞が無生物主語を取る例はまだまだあると思われるが、ひとまずこれぐらいにしておこう。

6. 結論

春木(2003)と本稿において、日本語と対比することでフランス語の性格をかなり明らかにすることができた。特に本稿では、春木(2003)の結論において述べた見通し、具体的には、言語システムの中に構造的に取り込まれた表現方策としてのメタファーのあり方が両言語において大きく違うのではないかという点について詳しく検討した。

16 説明を補足すれば、胃が食物を消化しようと機能しているのが感じられるということは、消化に手間取っているということであり、結果的に胃に負担がかかっている→胃が苦しいというつながりになる。

17 この例では「疲れている」よりも「くたびれている」のほうが自然であろう。これはよりくだけた表現を使うことでメタファーであることを明示して、つまり直喩的な表わし方をして容認されやすくしているのだと考えられる。

18 調理に関しては、移動動詞のrevenirを用いたfaire revenir de la viande「肉を軽く焼く」というような表現もあるが、堅くなった肉が火を通すことでどのように柔らかくなるからかとも思われるが、今のところこの意味拡張に関してはよく分からない。

先ず二つの論文において確認したフランス語の特徴をもう一度まとめておこう。

日本語に比べて、フランス語はいわゆる因果連鎖、行為連鎖の順に従って原因・理由となる事態を名詞化することで主語とし、結果的な事態を名詞化することで多くの場合目的語として表わす。日本語は原因・理由は原因・理由の状況節として表わし、結果の事態を文の主要な部分として、つまり主文として表わすことが多い。その意味で、フランス語はプロセス、つまり変化重視の言語であり、日本語は変化の結果重視の言語である¹⁹。

以上のようなフランス語の性格は、主語を変化する主体としてではなく、あくまでも変化を引き起こすエネルギーの源として捉えているということである。この性格が、他動詞構文・自動詞構文の別なく無生物主語を、本来人間を主語に取る動詞にも使えることの基盤となっているのである。

また仮想移動を初めとして状態変化を位置変化で表わすなど、フランス語においては移動表現が多用されるが、移動の主体あるいは移動を引き起こす主体はやはりエネルギーの発生源である。ということは、ここにもエネルギーの源として無生物主語を有生物のようにみなして、移動および移動を引き起こす主体として、無生物を人間を主語に取る動詞の主語として用いる基盤があるのである。このように主語を因果連鎖を推進させるエネルギーの源として捉える性格をフランス語が持っていることが、フォースダイナミックスを援用した分析が適合する所以である。

以上のようなことはある程度までは英語でも同じことが言えるが、フランス語ではさらにもう一つ重要な要素がある。それは名詞に男性・女性という性があり、また代名詞の体系において一部を除いて人間ともの・ことが区別されていないという点である。特に主語人称代名詞においては人間の女性と女性名詞がともに *elle(s)* で、人間の男性と男性名詞がともに *il(s)* で表わされるという点は重要である。それ以外にも直接目的語を表わす *le, la, les*、限定されていない目的語を表わす *en, être* の前に用いられる代名詞 *ce*、人もものも指せる *celui-là, celle-là* 型の指示代名詞、主格・目的格の関係代名詞など、人とのものが同列に扱われる場合が多い。これは言ってみれば、フランス語はこの世界をメタフォリックに捉えているということである²⁰。つまり、フランス語という言語そのものが表現方策としてメタファーを用いていると考えることができる。このような指摘は過去にもなされており、この考え方そのものは目新しいものではないが、ともすれば単なるスペキュレーションに終わりがちであった。しかし、認知言語学の知見が積み重ねられてきた今日、言語学的な根拠をもとにもう一度この主張を正面から検討すべきであると考ええる。

日本語においても、通常は人間や有生物を主語に取る動詞が無生物主語を取る場合があるが、

19 日本語の動詞がプロセス重視で必ずしも結果を伴わないという指摘があるが、ここで述べているのは事態の把握と表現の仕方のことである。因みに日本語の動詞がプロセス重視的であるという意見には疑問がある。

20 フランス語が、メタファーを基本的な表現手段として言語体系の中に備えているという考え方は、特に文法上の性との関連で大橋保夫氏が早くから指摘している。

その多くは状況に依存する一時的な擬人化メタファーであることが多い。また、そのような擬人化が成立するためには評価や利害が関係する文脈が必要であることも多い。評価や利害がメタファー、特に擬人化メタファーを成立しやすくする要素であることは明らかである。一方、フランス語では結果的に利害関係などが含意される場合はあるにしても、無生物を主語に取る条件としてそのような文脈を必要とするのではなく、いわばコンテキストフリーな文脈に依存しない言語の基本的な表現方策としてメタファーを言語構造の中に組み込んでいるのである。

メタファーが基本的な表現方策であるならば、それをいちいち断る必要はないわけで、そこからフランス語の無生物主語を組み込んだメタファーは基本的には隠喩（暗喩）であることになる。一方、日本語の場合にはフランス語的な表現が可能である場合も、原則として何らかの形でそれがメタファーであることを明示もしくは示唆する必要があるので、基本的に直喩的であることになる。フランス語は隠喩的であるという点は理解しやすいと思われるが、日本語が直喩的であるという点は必ずしも表現的に「のように」の類の要素を明示するという意味ではないので、少し分かりにくいかもしれない。本文では機会ある毎にその点に触れたが、今後機会があればさらに論じたい。その機会を待ちつつ、最後に、よく知られた詩を材料にもう一度、隠喩的なフランス語と、直喩的な日本語の対比を示して本稿を終わりにしたい。

(112) *Il pleure dans mon coeur. Comme il pleut sur la ville.*

「巷に雨の降るごとく、我が心にも涙降る」

確かにこの、詩人の言語感覚によって生み出された *il pleure* という表現を含む全体は *Comme il pleut* と「のように」表現で説明がなされているので直喩表現になっている。しかし、いくら詩とはいえいきなり *il pleure* と始まっている点はやはり隠喩的であるし、*il pleure dans mon coeur* という文そのものは隠喩である。フランス語ではまた、*il pleut des larmes dans mon cœur* とも書けるがそう書くと直喩になる。一方、堀口大學の日本語訳である「涙降る」という隠喩的表現はフランス語の隠喩表現をそのまま訳したものであり、日本語的ではない故にかえってその新鮮さが詩的な効果を出しているのである。この表現は詩あるいは翻訳なので受容されているが²¹、通常の日本語であればやはり「涙が雨のように降る」あるいは「涙雨が降る²²」のように直喩表現になる。

もちろん、隠喩的、直喩的というのは両言語の基本的性格なので、いずれの言語でも傾向の問題であるのは言うまでもないが、様々な点においてフランス語は隠喩を好む言語であり、日本語は直喩を好む言語であると言える。

21 あるいはあまりにも人口に膾炙した故に不自然に思わないだけとも考えられる。

22 涙雨という表現は、鈴虫が「鈴のような音で鳴く虫」、甲虫が「甲のような形をした虫」と理解出来るのと同じく直喩表現である。

参考文献

- Goldberg, A. E. (1995) : *Constructions : A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago : The University of Chicago Press. (日本語訳 : 河上他 (訳) (2001) : 『構文文法論』、研究社)
- Talmy, Leonard (2000) : *Toward a Cognitive Semantics*, 2 vols. Cambridge : The MIT Press
- Ungerer, F. & H.-J. Schmid (1996) : *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Longman. (日本語訳 : 池上他 (訳) (1998) : 『認知言語学入門』、大修館書店)
- 大橋 保夫 (1993) : 「テレコ・自由の女神・ボードレール」 「フランス語とはどういう言語か」、大橋保夫他著『フランス語とはどういう言語か』 (第1部第1章、第2章)、駿河台出版社
- 河上 誓作 (編著) (1996) : 『認知言語学の基礎』、研究社出版
- 川口 順二 (1998) : 「動物名から道具名へーメトニミ・メタファ・意味の変化」 『芸文研究』 V.75, pp.254-269.
- テイラー、ジョン (辻 幸夫訳) (1996) : 『認知言語学のための14章』、紀伊國屋書店
- 春木 仁孝 (2001-2002) : 「フランス語の発想・日本語の発想」 『ふらんす』 (2001年4月号～2002年3月号) 白水社
- 春木 仁孝 (2003) : 「認知言語学的観点からの日・仏対照の可能性」 『言語文化研究』 第29号 (大阪大学言語文化部・言語文化研究科) pp.333-352.